

「国際金融人・岡部陽二の軌跡〜好奇心に生きる」アマゾン Kindle 版への書評

住友銀行マンの面目躍如たる自伝 雨露歩、2018年10月23日

私は金融を担当したことのある新聞の経済記者である。いまではるか昔のことになったが、本書の著者が住友銀行の国際金融部門の開拓者的な活躍をされた時代のなかで、ニクソンショックのあった1971年ころには日銀記者クラブを受け持っていた。そのころ、政府・日銀は、固定為替制度の崩壊がおこるなどとはおくびにも出さない。無知な我々はその8月15日の衝撃的な金・ドル交換停止のニクソン声明の意味すらまったくわからず、右往左往したことをいまも夢魘のように思い出す。当時、国際金融の問題についての取材先といえば、まず外国為替専門銀行だった東京銀行と、この分野では最も知見の豊富だった三井銀行であった。大都市銀行の三菱、住友、富士銀行には、この点で取材に応えられるここぞという人材があまり見当たらなかった。

そういう時代をまたいで、住友銀行の国際金融部門の先導となって戦い、働いたのが著者である。むろん私は当時、この人を知る由もなかったが、このころから国際金融の最前線で活躍された状況を、驚くほど正確に事実を踏まえて書かれた本書を通読して、いかに国際金融後進国のわが国の銀行が世界のマーケットに食い込んでいくかをまざまざと見せつけられる思いがする。大蔵省(財務省)日銀のきびしい規制や、企業などの無知のなかで、それはどれほど苦勞と苦痛の多いことだったろう。著者は自分のした仕事を客観的に描く禁欲的な姿勢を一貫して守っており、感情的な表現は抑制されているが、当時の取材記者として、その努力、闘志のすごさを行間に読む思いがする。

それにつれてもうひとつの感想は、これは一人の典型的な「住友銀行マン」の姿を自ずと表現しているということである。戦後の住友銀行の性格を確立したのは堀田庄三頭取ということは常識になっているが、長くこの銀行を率いた堀田氏の統治精神はあらゆる意味で「厳しい」ということだったと思う。怠慢などはまったく許されない空気が、取材に当たっても痛感されたものだ。本書の著者は自らそういうことを表白されてはいないが、この猛烈な仕事ぶりは住友銀行マンの模範だったに違いない。

本書には、著者の幅の広い人生行路、家族愛、趣味などもゆたかに書き込まれているが、そういう生き方を展開できた著者の強靱さには、感嘆してしまう。日本のある時代のバンカーを知るといううえでも、一読をお勧めしたい。

多彩な人脈と好奇心が人生を彩る 「私の履歴書」 研究家、2018年9月25日

表題にある「軌跡」と副題の「好奇心に生きる」の看板どおり、1970年代以降の金融界における国際化・証券業務への多角化の先駆者として邦銀の先鞭をつけて新しい業務を次々に切り開いていった数多くのイノベーションが闊達な筆致で綴られている。

この本は日本経済出版のプロの編集者とのインタビューを通じて完成されたもので、文章は流暢簡明で読みやすい。

著者のダイナミックな仕事ぶりはまさに国際バンカーとして、所々に、英国のチャールズ皇太子を初め各国の名士の方々と交遊が出てくる。この人脈が著者の人生に彩りを添えたのは容易に想像できる。

加えて、誕生から今日に至るまでのビジネス生活は勿論、特異な鉱物採集、夢の洞窟探検などの大自然の旅、そして欧米生活でのオペラやミュージカルなど多彩なエピソードがちりばめられた内容にも引き込まれる。

先見の明とゆるぎない信念を持ってサラリーマン人生の運命をさえ変えてしまい、まさに人生を二倍に生きてきた迫りに圧倒される。

「運も実力の内」とよく言われるが、常にアンテナを張り巡らせていないことには運も付いてこないことが、この本から実感できる。筆者のように人生で遭遇するあらゆる場面を素敵なものに変え、またとない貴重な出逢いと感じることが出来れば、この世に争いは起こらず、皆が元気に働けるのではなかろうか。

著者の国際金融人としての多彩な経験や広島国際大学教授としての医療や教育論など、多方面の活躍には目を見張るものがある。とりわけ「好奇心の塊」のような著者の生きざまはサラリーマン人生を淡々と過ごしている若者には大いに参考になる。

また、日経「私の履歴書」の登場人物も、その紙面に先祖や両親の業績を丁寧に著述している人も多い。著者のように父親の顕彰をきちんと書いておくのも子供たちへの遺産でもあり、自分史の価値を高めるものとして評価できる。

好奇心に生きる~何事にも決して諦めないしぶとさ

ヤナギネコ、 2018年10月7日

個人の曖昧な記憶を自伝風にまとめあげたものは多々あるが、この「国際金融人・岡部陽二の軌跡」は、それらとは一線を画するものである。まさに明快そのもの、何やかやを虱潰しに調べ上げて、著者個人にとどまらず、私たち日本人の来し方を様々に照らし出し、考えさせられる内容になっている。一大傑作である。

さっき、述べた「虱潰し」という言葉は、物事を片っ端からすべてにわたって片付けていくことを意味する言葉であるが、今や虱の絶滅とともに死語になっているのかも知れない。

著者によって書かれた虱潰しは文字通り、不衛生な着た切りシャツに繁殖する虱を、徹底的に、両手の爪先で潰していったという事実を書いている。そういう難民生活を強いられた十一歳の日課にあって、満州の小京都とも言われる、桜や柳のそよぐ風景を忘れることはなかった。

決して諦めない姿勢は、まさにこの虱に培われたものでないだろうか。同時に又、一大難儀を、次々と踏破し、男の出世のトップを走りながらも、それらにまつわる些事もまた打ち捨てることなく、何よりはらからを慈しまれることなど、こころの風景の原点をここに見るような気がする。

もっとも強い男は、もっとも優しいということであろう。

ところで、経済にも政治にも疎い私ではあるが、昔の銀行という立ち位置は現代のそれとは大きく異なって、庶民からみれば神さま仏さまという存在であったように覚えている。

そんな中であって、「寝食を忘れる」というような生易しい言葉の響きには追いつかぬほどの現実を体験されたことであろう。

飽くなき好奇心は、これから先どこまで発展されるのであろうか。

今、読み了へて、筆者もまたおちおちしてられない、ちょっと頑張ってみようかと、それなりの勇気をいただいている。

さまざまな苦難を乗り越え、こんなにも熱く色濃く生きて来られた岡部陽二氏の栄光の軌跡を読了し、感動のあまりしばらくは茫然といたしました。

**トンネルの灼熱地獄無蓋貨車
疎開貨車降りて捕虜たり敗戦日**

ご母堂のこの二句からも察せられる通り、終戦間際に侵攻してきたソ連からの満州逃避行の序章は息つく間もなく読み継ぎました。

その過酷な日々は当時十一歳の岡部少年にして、誰にも頼れない、何でも自分でやるという意識が育ったと述懐しておられます。思えば岡部氏の原点はここにあったのかもしれませんが。

ロスアンゼルスをふり出しに国際金融分野に総力を発揮された長き歲月、激務の中を越えて来られた、その体力、精神力、探求心、好奇心には感服するばかりです。

時あたかもノーベル医学生理学賞に本庶先生が受賞されました。本庶先生は既存に甘んずることなく絶えず好奇心を持ち、勇気をもって挑戦する心を語られました。

まさしくそれは岡部陽二氏の生き方そのままと重なりまして、私の心を熱く震わせました。

ことに嫌なことに背を向けず、何事にも邁進されることに教えられます。

船酔いを解消するため京大ヨット部に入部され、配属の部署に面白さを感じられないときは、英語検定に挑戦、日米会話学院へ留学の道を自ら切り拓かれるなど、枚挙にいとまありません。

中でも若くして、住友銀行七十五周年記念の懸賞論文に最高賞受賞。これは規制に対する挑戦であり、住友銀行の国際化はここに始まり、いよいよ岡部氏の活躍のスタートが切られたのでした。

鉱物採集、ゴルフ、囲碁、真向法、水泳、切手収集など、超人的趣味の多彩には絶句です。仕事一途に自分を追いやらず、心を遊ばせるという英智あればこそ。

自分史にひらく一輪梅の花 陽二

あとがきの一句に心打たれつつ、陰になり日向になり岡部氏を支えてこられた賢明なるご令室のすばらしさを思うばかりです。

行動派国際金融人岡部陽二の成功の秘訣は何か 塩山三郎、2018年10月22日

実に痛快な本である。一気に読了し、爽快な気分を味わった。本著は国際金融人岡部陽二の「自分史」であり、岡部家の「ファミリー・ヒストリー」でもある。「学問一筋で融通の利かない真面目一徹」の父と「明るく全て前向き」な母の第一子として誕生。長男乍ら、“The son of the sun”たるべしと「陽二」と命名。

両親の期待の大きさが伺える。父の満州国建国大学教授時代から、著者の記憶の基く自分史が始まる。満州から内地への引き揚げは、正に難民状況、波乱万丈だった。家族全員で力を合わせこの苦難を乗り越えた経緯が極めてリアルに語られ、レアな体験だけに読み応えのある部分だ。帰国後、著者は京都で両親に見守られ順調に成長する。学業、結婚、会社人生、家庭生活、転職、趣味、健康等あらゆる面で人も羨むような人生を見事に編み上げる。読後には、元気と勇気、知恵と知識とを授けられたような心地よい充実感に浸ることができた。

同じ金融界に身を置いた私にとっては、著者の国際金融活動の部分が最も心に強く響いた。40年もの長きに亘り、著者は世界各国を欣喜雀躍として飛び回る「成功譚」は正に圧巻だ。行動派バンカーの面目躍如である。なぜ、このような見事な成果を挙げ続けることができたのか。著者は、「日に三度、自らを顧みよ。不作為・不親切・不勉強の罪を犯さざるや」をモットーとし、拳拳服膺し身を処してきたという。やるべきことを明日に延ばさず、接する人すべてに最大限の親切さをもって対応し、相手の正しい理解と事の本質の把握のための勉強を怠らない、これが著者の行動哲学と理解した。これを実践すれば、接する人すべてから信頼、尊敬、敬愛を得、岡部ファンは増え続ける。ビジネスがうまく回転するのは当然と納得した次第。

敢えて欲をいえば、次の2点が気になった。一つは、日経新聞の「私の履歴書」のスタイルを意識し過ぎたのか、若干紙幅を制限した嫌いがあるのでは。この制約を取り払い、もっと自由に筆を走らせたなら、国際金融活動などもっともっと「成功の秘訣」が具体的に伝えられたのではないか。二つ目は、自分史は本来的に「陽」の面ばかりに日が当たり、「陰」が隠れやすいという宿命を背負う。しかし、成功者にも失敗例は事欠かない筈。数少ないかも知れないが、国際金融活動での失敗例についての記述なども加われば、「成果」が一段と光り輝いたのではないか。尤も、「陽」二の自分史だけに陽が強調されるのは避け難かったのかも知れない。いずれにしても、極めて質の高い「私の履歴書」である。是非、ご一読をお薦めしたい。

波乱万丈 痛快なバンカー人生 住友銀行の後輩、2018年10月25日

国際金融人 岡部陽二の軌跡（日経新聞出版社 2018年）を読みました。

元銀行員の書いた「自分史」など退屈な本に決まっていると思われがちですが、本書は、波乱万丈、実に痛快な読み物です。

まず驚くのは、満州難民生活のくだりです。終戦とともに、父親はシベリヤに抑留され11歳の岡部少年は、満州の街角に立って、片言の中国語で餅売りをして、残された家族の生活をささえます。夜は、不衛生な着た切りシャツに繁殖する虱を、両手の爪で潰して行く毎日です。こんな逞しい少年時代の生活が、後年の物に動じない強靱な国際金融人岡部陽二の骨格を作ったのでしょう。

岡部氏が入行した住友銀行は、堀田庄三頭取の下、厳しい経営と実力本位の人材登用で知られていました。そんな企業風土がぴったり合っていたのでしょう。将に水を得た魚のような勢いで、難関を次々に突破して行きます。住友銀行国際部門を担って、当時、国際金融の後進国だった我が国が、世界のマーケットに食い込んでいく尖兵としての活躍ぶりが見事に描かれています。そして、1980年代には、世界のトップバンクとして、「AAA」のレーティングを獲得した住友銀行の欧州統括専務取締役（ロンドン駐在）として、縦横の活躍をする岡部氏の姿は、我々後輩のあこがれの的でした。

そんな日本と住友銀行の栄光の日々をなつかしく思い出させてくれる名著です。